

建学発 2014-第 0058 号

平成 26 年 5 月 20 日

J. フロント リテイリング 株式会社
代表取締役社長 山 本 良 一 殿
株式会社 大丸松坂屋百貨店
代表取締役社長 好 本 達 也 殿

一般社団法人 日本建築学会
会 長 吉 野 博

大丸心齋橋店本館の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、貴社におかれましては、大阪市中央区心齋橋筋に位置いたします大丸心齋橋店本館を建て替える予定である由、新聞等の報道により聞き及んでおります。

本会では以前より我国近代建築の調査研究を行い、その成果を『日本近代建築総覧』にまとめ 1980 (昭和 55) 年に刊行しております。その中に当該建物が歴史的文化的価値の高い近代建築として記されておりますこと、ご高承のことと存じます。また当該建物は、大阪府教育委員会がまとめた『大阪府の近代化遺産』にも掲載されているほか、近代建築の保存に関する国際組織の DOCOMOMO の日本支部 DOCOMOMO Japan により優れた日本の近代建築 100 選の 1 つとして選定されております。その歴史的文化的価値が、すでに広く認められている建物です。

当該建物は、日本で活躍したアメリカ人建築家 W.M.ヴォーリズの設計によって 1933 (昭和 8) 年に竣工した鉄筋コンクリート造の建物で、アール・デコやゴシック風の装飾を建物の内外にまとめた見事なデザインによるものです。また当該建物は、大阪を代表する御堂筋に面して建ち、戦前期大阪の繁栄を象徴する建物であり、地域の景観にも寄与しています。

その建築の有する価値は別紙「見解」に記されたとおり、近代日本における歴史的建築として、また景観上も大変優れて価値の高いかけがえなきものであります。こうした建物は、機能に応じた整備や構造体の補強によって長寿命化を図り活用していくことが、建築資源の有効活用の視点からも求められております。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、当該建物の保存活用を図るための方途を積極的にご検討の上、推進されますよう、お願い申し上げます。

なお、本会はこの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2014年5月20日

大丸心齋橋店本館についての見解

一般社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 杉本俊多

1. 建物の概要

大阪市中央区心齋橋1丁目に所在する大丸心齋橋店本館は、1922年(大正11)より1925(大正14)年にかけて心齋橋筋に面する東側部分(1期、2期工事部分)が建ち、つづいて1931(昭和6)年より1933(昭和8)年にかけて御堂筋に面する西側(3期、4期工事部分)が増築され、ほぼ現在の主要部分に当たる建築面積が竣工したものである。東の心齋橋筋側部分は鉄筋コンクリート造6階及び地下1階、西の御堂筋側部分は鉄骨鉄筋コンクリート造8階及び地下3階で北西部に塔屋をもち、軒高102尺、塔屋頂部まで129尺とされている。1933(昭和8)年5月の竣工時の総面積は建築面積1350坪、総延べ床面積11700坪と記録されている。

設計は米国人建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ(William Merrell Vories, 1880～1964)率いるヴォーリズ建築事務所、構造計画は内藤多仲、施工は竹中工務店。建築様式は心齋橋筋側ブロックではネオ・クラシック、御堂筋側ブロックはネオ・ゴシックを基とするが、共に低層部を御影石、最上階及び塔屋をテラコッタ、中間階外壁を茶褐色タイル仕上げとする3層の外観構成でまとまりがあり、ファサード(正面外観)中央に開かれた玄関部及び頂上部など石彫装飾、テラコッタによる華やかな意匠を備えている。その装飾的意匠は館内に展開し、とりわけ1階グランドフロアの高い天井周り、エレベーター、階段など、種々の様式的意匠からアール・デコなど注目すべき表現を有している。

ところで、本建築は戦時下において照明灯具など供出し、1945(昭和20)年の戦火によって5階以上を焼失しているが、戦後に修復復旧され、さらに1956(昭和31)年の7～8階増築など整備発展を経て今日に至っている。そうした建築と歴史性が評価され、日本建築学会が全国の主要近代建築を収録した『日本近代建築総覧』(1980年)に掲載されている。また近代建築に関する国際組織であるDOCOMOMOの日本支部DOCOMOMO Japanによって2003(平成15)年に重要建築100選の一つに選定されている。

なお、建築記録史料には、竣工直後に刊行された日本建築協会誌『建築と社会』(1933年7月号)に詳しい記録があり、また『ヴォーリズ建築事務所作品集』(城南書院、1937年)に竣工時の写真等が収録されている。調査記録には『大阪府の近代化遺産』(大阪府教育委員会、2007年)において「注目すべき近代化遺産」として報告されている。

2. 歴史的価値

1) 建築意匠・構造・平面計画上の評価

先の建築概要において、本建築の歴史様式による特色ある外観構成などについて記しているが、具体的特色を挙げると、先ずは大正期建築のファサードを留める心齋橋筋側玄関

上部の半円アーチを飾る孔雀のレリーフがある。ニューヨークのアトランティック・テラコッタ社製で、浮彫りレリーフの彩色テラコッタは当時屈指の名品に違いない。華やかさにおいて、これに勝るのが御堂筋側のファサードである。最上階とグランドフロアの外壁を御影石とテラコッタで明るく仕上げ、渋いスクラッチタイル張りの中間層壁面とのコントラスト鮮やかな構成は、東側の外観構成を継ぎながら幾何図形を重ねるアール・デコで装ったものである。とりわけ、ネオ・ゴシック様式をとる西面ファサードの中央玄関では、通例の尖りアーチで構成するところを水平アーチとし、雪の結晶のような石彫と電飾で埋めた中央玄関は、アール・デコ・デザインの見所であり、その上部には一對の孔雀と、3羽のペリカンと鷹が並んでいる。これら野鳥のモチーフは館内のステンドグラス、天井回りにも現れ、華やかで親しみ深く印象的な空間としている。

こうした本建築の意匠上の特色は、伝統的様式を基としたうえに、アール・デコの近代的表現、芸術性の高いステンドグラス、そして類例を見ない電飾照明の効果を巧みに融合したところにあり、本建築は近代における百貨店建築として優れて、典型的なものであり、現代建築では再現し得ない作品性を備えている。

次に、1933（昭和 8）年の増築部を中心に、建築構造・平面計画について、次のとおり評価できる。

構造設計は当時において耐震設計の第一人者といわれた早大教授の内藤多伸である。本建築の柱間は 20 尺（中央部のみ 24 尺）の均等配置で、四方隅に耐震壁をバランスよく配置した耐震構造、耐火耐水計画についてなど、竣工時の建築概要に謳われている。

平面計画をみると、東西面の中央部玄関を貫く中軸の動線（導線）があり、それを中心に南北がほぼ対称に計画された合理性の高い計画である。つまり、エレベーター及び階段を中央部のホールの位置と隅部の 4 箇所に配置され、その階段脇は南北面の玄関として通りに開かれたもので極めて明快な計画といえる。また店内のショーケース、ショーウィンドウは耐火とモダンを目指したスチール製であったとも記録にある。

こうした平面計画の明快性、そして竣工時には「誇るに足る」と記された空調設備など内部の諸設備は、後年の部分的増築や近年の改修による変化の及ぶところであるが、竣工時の状況を想起再考することにより本建築の特色を解することが出来る。

周知のように我国での鉄筋コンクリート造による百貨店建築の歩みは、大正初期の三越本店に始まり、都市の発展に呼応して建築され、昭和初期には都市生活・都市文化の象徴的存在となった。そうした歴史的由緒ある百貨店建築は近年において高島屋東京店（1933 年）が重要文化財となり、また三越本店（1927 年改修）、伊勢丹本店本館（1933 年）が東京都選定歴史的建造物として評価され、維持活用されている。大丸の本建築の有する建築的特色と価値は、そうして先例に勝るとも劣らない内容を有するといえよう。

2) W.M.ヴォーリズの建築作品としての評価

設計者のウィリアム・メレル・ヴォーリズは、1880（明治 13）年米国カンザス州に生まれ、コロラド大学卒業後の 1905（明治 38）年に滋賀県立商業学校英語教師として来日した。教職を離れた 1907（明治 40）年、自らの設計で建てた近江八幡 YMC A 会館を拠点とした活動を始め、1910（明治 43）年には米国人建築技師チェーピンを迎えてヴォーリズ合名会社を設立し、1920（大正 9）年にはヴォーリズ建築事務所と改めて本格的な建築活動を始めている。また同志とともにキリスト教活動の近江ミッション（1934 年に近江兄弟社）を起

こしメンソレータムの販売など様々な事業をすすめた。

ヴォーリズの建築には米国ミッションに関係するキリスト教会堂、ミッションスクールの建築が多くあり、また米国の住宅を範とした多数の洋風住宅を設計し、近代的洋風住宅の普及にも貢献した。ヴォーリズ建築事務所の建築作品には業務ビル、銀行など都市の建築もあり、とりわけ大丸心齋橋店本館の建築は当時の米国建築の先進性を導入し、アール・デコのデザインなど際立った内容を備えている。大丸に関連しては京都店のほか社主下村家のチューダー様式の邸宅も西洋館建築として著名である。

現存する建築作品には、旧近江ミッション住宅（近江八幡、1913年）、ヴォーリズ記念病院（近江八幡、1918年）、西南学院旧本館（福岡、1920年）、大阪教会（1922年）、九州学院講堂（熊本、1925）、関西学院（西宮、1929年）、神戸女学院（西宮、1933年）、豊郷小学校旧校舎（滋賀県豊郷町、1937年）などが残されている。それらは共通して米国建築の伝統と技術を応用しながら日本の風土に適合したもので、堅実な手法と親しまれるデザインを備えている。そうしたなかで本建築は百貨店建築として際立つ特色があり、最も著名な建築作品といわれている。

3) 地域・景観的価値についての評価

本建築の位置する中央区心齋橋は約40間四方という大阪の伝統的な地割を有する街区にあり、心齋橋筋は市中における伝統をもつ目抜き通りである。この地に大丸が開業したのは1726（享保11）年に遡り、以来発展し近代に至り、大正末の第2期工事で竣工した本建築は、心齋橋筋に面して間口約60メートル、6階建ての規模を誇り、在阪百貨店では北浜の三越（1917年）につづく建築であった。そして昭和初期における西側への増築計画は御堂筋の拡張整備に対応したものだ。御堂筋は大阪市における都市計画街路1号線として、地下鉄道の建設に伴って1926（大正15）年に着工され、1933（昭和8）年に梅田～心齋橋間が開通し、やがて難波に至る南北幹線道路となった。以来、銀杏並木と当時から高さ100尺に整えられた近代建築が連なる道路景観は、大阪の誇る都市景観として継承されている。

つまり、心齋橋の1街区を占める本建築は大阪の都市空間の伝統と、近代に形成された特色ある都市景観を担い、彩る重要な建築として広く認知されているものである。一方、御堂筋沿道の建築も近年建て替えが進み、なかでも大阪市南部における商業中心地区である心齋橋周辺環境は変貌著しいものがある。そうしたなかで、地域の歴史と風格を有する百貨店建築として、本建築は都市大阪における地域的ランドマークとして欠かせない存在となっている。

3. 総合的価値

以上のように本建築は、建築意匠・構造・平面計画・設備に関する評価を勘案すると1920年代から1930年代にかけて日本の大都市に出現した百貨店建築として、その典型的存在であり、また、日本の近代建築史上に大きな影響力を持った米国人建築家ヴォーリズの代表作として位置づけられ、そして、日本を代表する商都大阪のランドマークとなる建物としてきわめて貴重な存在であるといえる。



笠原一人 撮影